

# スーパーキャスターへの道

大阪アングラース 本多 茂

## ①現代キャスターの基礎知識

投げ釣りをやっているとき「何も釣れないな」と思っているとき、突然バタバタと魚が釣れだすことがある。逆に入れ食い状態から、パッタリと釣れなくなることもある。こんなとき、キャスターは「潮が変わったのかな」とつぶやくことがある。また、大漁のときは「潮がよかった」。ボーズのときは「潮が悪かった」ということがある。この「潮」とは何者なのだろうか。投げ釣りキャスターにとっての潮の正体を少し考えていきたいと思う。

投げ釣りの好ポイントとして知られているエリアには潮流の速い場所が多い。日本海の境水道、徳島の小鳴門筋、淡路島や小豆島、家島など瀬戸内の島々、鳥羽沖の島など急潮で名をはせている釣り場が多い。もちろん潮流の遅い場所でも好釣り場はたくさんあるのだが。しかし、潮流の速い場所では潮の流れが、海底を削り複雑な海底を作り出し、魚の住処を作ってくれる。複雑な海底は複雑な潮の流れを生み出す。そして、潮は魚たちのために餌を運んでくれる。このように、潮の速い場所では魚の生態系のためによい循環を作ってくれるのである。投げ釣りでは単に潮の速い場所を狙うのではなく、潮の速い場所の潮目や潮ヨレ、反流点などの潮が変化する場所をポイントとして狙っていくのである。ここでは潮の変化ある場所を総称して「潮目」と考えて、まずは潮目に付いて解説したいと思う。

投げ釣りのポイントでよく「潮目を釣れ」ということがある。なぜだろう？これは潮目付近では潮の流れが複雑になり、海底をかき回されて魚の餌となるプランクトンや環虫類が豊富にあるため、魚が寄りやすいためだと考えられる。また潮が運んでくる豊富な餌の溜まり場でもある。そのため、当然のことながら魚がたくさんいるところは好ポイントなのである。それではどんな所に潮目はできるのだろうか。潮目のできるところに釣座を構えることは好釣果を得ることができるはずである。これから、事例として目に見える地形からと海底の状況からの2つの視点で潮目のでき方を考えてみよう。

図①を見ていただきたい。これを見て思いつく方かも多いと思うが淡路島・都志港の地図である。満ち潮時は左へ、引き潮時は右へ流れる。どちらの潮も波止へ当たった潮が方向を変えられ、直進してくる潮とぶつかるところが潮目のできやすいポイントになる。概念的には理解していただけたと思う。これを見ていただいてもわかるとおり、波止の先端とカーブ付近は絶好のポイントとなる可能性を秘めているのである。実際に都志で釣りをなさった方はお分かりだと思うが、南側のテトラのあるエリアではシモリが多数あるのでさらに複雑な潮の動きを見せ、思わぬポイントができることもある。とはいうものの、実情は潮の速さ、海底の変化などの複合要因によって、さらに複雑な潮の動きになっているので、状況によっては潮目のできる位置か思いのほか遠く、投げ釣りで届かないエリアやまったくできないこともある。

図にはしていないが、湾になっているような釣り場ではさらに潮が複雑に動くことが考えられる。岬にぶつかった潮が反流点となって、湾内に入ってくる。さらに、反流がぶつかり合っているいろいろな場所に潮目を作っていく。地形をよく眺めて潮を読めば、必ず潮目のできやすい場所が想像できるはずである。基本的には岬の突端ということになるであろうが、思わぬ好ポイントを発見することができるかもしれない。それが好釣果

に繋がるはずである。

海底の断面図を想像していただきたい。よく、帯状に潮目のできることがあるが、これは海底のカケアガリに潮流がぶつかり海面に向かって流れていく。これが複雑にぶつかり合って潮目ができるのである。同じような状況はシモリの周辺などでも生まれている。つまり、海底に変化のある場所では潮目ができやすい＝魚が集まる場所なのである。なお、鳴門の渦潮なども急潮と複雑な海底の状況が生み出す芸術品、潮目の大型版なのである。

さらに潮流には潮の大きさがある。旧暦の1日、15日におとずれる干満の差が大きい大潮をはじめとして、非常に干満の差が小さい小潮。そのあいだの中潮。そしてほとんど潮の動きが見られない長潮。そして、潮が大きくなる転換期に当たる、関東では潮変わりとも呼ばれる若潮。これら5パターンの潮があるのだが、一般的には干満の差が大きい大潮時が、潮もよく動きベストだと言われる。しかし、小鳴門や境水道などの急潮の釣り場では小潮周りや若潮、長潮などの干満の差が小さい場合のほうが釣りやすいと思える。干満の差が小さい日本海では大潮時がベストで少しでも潮が動くからであろう。このように釣り場の状況によって潮の大きさのTPOもあると考えるほうがよいだろう。

このように海底を読む力、潮を読む力もキャスターには必要な力と言えるのではないだろうか。目に見える地形、海底の状況、潮の流れすべての状況を読んで、潮目の場所＝好ポイントを見つける力が必要なのだ。好ポイントと呼ばれる場所はこの条件に当てはまる場所が多いはずである。

## ②各フィールドの潮的特長

一言に“潮”といっても日本海側と太平洋側、そして瀬戸内海と潮の流れや大きさがかなり違う。そこにターゲットを当てて少し考えてみたいと思う。ちょっとした潮を利用した裏技もご紹介しよう。

まずは潮位について少し考えてみたいと思う。ここでは単なる潮位ではなく、干潮時と満潮時の潮位の差に注目したいと思う。日本海側の舞鶴港や境水道では満潮と干潮時の差は大潮時で30センチほどである。これに比べて太平洋側の串本や田辺で1.8メートル、大阪・神戸が1.6メートルである。さらに瀬戸内に目を向けてみると岡山の宇野港で2.4メートル、水島で3.3メートル。尾道にいたっては3.5メートルも潮位の差があるのだ。尾道沖の因島では満潮時釣りをして、そこそこ釣れていたポイントが干潮時には陸地になって、しかも前の島とつながってしまうような場所もある。でも、潮に乗って魚はやってくるのである。

このことから何がわかるのであろう。当然潮位の差が大きいほど潮流は速くなっていくはずである。日本海側では潮位差が30センチしかなく、非常に潮流は遅いのだろうと想像できるはずである。日本海側と太平洋側では1.5メートル、瀬戸内海との差にいたっては3.2メートルも潮位差があるのである。日本海側と太平洋側、瀬戸内海との差は非常に大きいのである。特に瀬戸内海には急潮の場所が多いのもこのことから推察されるのである。来島海峡や備讃瀬戸など船の難所と言われるほどの急潮の場所があるわけだ。なお、日本海側でも境水道のように潮の速い場所があるが、これは地形的な要因が大きいようである。

日本海側ではこのことから全般的に潮流の流れが緩やかなので、潮流による時合いとるのがはっきりしていないことが多い。早朝、夕刻など時間による時合いが優先される

ようだ。しかし、緩やかながらも少しは潮の流れる場所もあるのでポイントとしては潮通しのよい場所を狙うのがよいだろう。

太平洋側は干満の差ははっきりしているので、釣行の際は必ず潮時を調べていくほうがよいだろう。時合いは潮時に左右され、ポイントにもよるが多くは満潮になる直前、満ち潮から引き潮になる潮の変わり目などによく魚が釣れるはずである。

瀬戸内海の急潮の釣り場では一番潮の速い時には、投げ釣りでは流されて、仕掛けも浮き上がり釣りにならないこともあるはずである。したがって、時合いは満潮・干潮の潮止まり前後に限られる釣り場もあるほどである。瀬戸内海では少しでも変化がある、潮のゆるい場所がポイントになっていることが多いようだ。

潮には潮時というものがある。釣りには一般的に満潮時付近がもっとも釣れる時合いとして認識されているが、太平洋側と瀬戸内海では満潮時間に約4時間の差がある。瀬戸内海が遅いのである。これを利用して、淡路島では東浦で満潮を釣って、西浦に移動してまた満潮を釣るということができる。さらにその後、東浦に移れば、また満潮を釣ることができるのである。一日に3度の満潮時の釣りは非常においしいと言えるだろう。試してみてください。

さらに日本海の境水道も急潮で名だたる釣り場であるが、本流筋は潮止まりの一時期しか釣りにならない。もちろん魚影は濃いので、それだけでも十分釣果はあるのだが。しかし水道筋でも少しへこんだ場所や波止の陰になっている場所では、潮が少しはゆるい場所がある。そんな場所では本流の影響を受けて潮が干満に関係なく左右に変わったりすることがある。一日に潮変わりが何度もくると同じ状況になる。そんなときはバタバタと大物が釣れる。具体的には水道筋奥の島根県側の森山近辺やその対岸の隠岐汽船当たりが狙い目であろうと思う。これは、小鳴門筋や明石近辺の釣り場でも見られる傾向なので、そういう釣り場を探してみると好釣果をえられるはずである。

### ③対潮流の基本攻略

急潮の中で投げ釣りをするとき、仕掛けを止めるということが一つの課題になる。仕掛けを止めるときの道具立てはどうすればよいのだろうか。まずはその部分を追求したいと思う。

よく、速い潮の釣り場でオモリを30号、40号とどんどん重くして釣りをしている人がいる。しかし、仕掛けはどんどん流され、浮き上がり釣りにはならないのである。本当に対策をしなければいけないのは潮流にたいして一番の抵抗を受けるのは道糸である。ここでは道糸に一番注目したい。では、道糸を細くしていけばよいのだろうか。それだけではなく材質にも注意しなければならない。たとえばPEラインは強度もあり、伸びが少ないのでアタリも非常によく出る。通常の釣りなら、ナイロンの糸より1号細くして飛距離を稼ぐこともできよう。しかし、実はPEラインの比重は海水とほぼ1:1なので非常に沈みにくく、流されやすいのである。もちろん、冬場の風の強い日の釣りにも向いていない。非常に流されるのである。通常のナイロン糸は太いラインを使うのならともかく、細い糸では強度に不安がある。そこで注目したいのだが、最近種類も増えてきたフロロカーボン系の道糸だ。比重も1:4ぐらいと沈みも速く、PEラインほどではないが強度もあり、伸びも少ないのでアタリが出やすい。3号でも従来のナイロン糸の4号以上の強度があるので、冬場の釣りでも十分に使えるのだ。私は東レフィッシングのトヨフロンエクセルサーフという糸を愛用している。他の道糸が4000円近

くするのにナイロン系の糸と変わらない半額以下で買えるので魅力的な値段である。

つぎの視点はやはりオモリであろう。よくスパイクオモリなどを天秤にぶら下げて投げ釣りをしている人を見るが、私はこのオモリはあまり好きではない。むしろ、巻き上げの抵抗は大きいし、遠投が利かないので大嫌いである。そして、急潮にはやはり流されて、効果がないような気がしているのである。私がよく使うのはオモリに天秤が固定されているオモリ、つまり海草オモリや熊本天秤のような型のL型の天秤固定型のオモリである。これは、天秤が固定されていることにより、海底に着床してから天秤の部分がつっかえ棒になるので比較的流されにくいと思う。重さは最大でも35号ぐらいまでしか私は使用しない。竿とのバランスもあるが、35号でとまらないものは40号でも50号でも多分、流されてとまらないと思えるのである。

オモリの先は仕掛けである。潮流の速い場所では基本的に底にいる魚、つまりキスやカレイなどを狙う場合は仕掛けを短めにし、浮き上がらないようにすることが大事になる。また、ガン玉オモリを打つのも効果があるだろう。逆にチヌやスズキなどのように少し浮かすと効果のある魚を狙う場合には、ハリスを少し長い目にとってやると仕掛けが浮くのでよいだろう。また、釣りバリも多少影響される。細軸のO社の投げ専キスや速攻カレイのような細軸のハリスは浮きやすいし、カレイ針やビックスーフのような太軸のハリスは沈みやすいのである。

さらに工夫できる場所では餌にもある。マムシなどの虫餌でもなるべくまっすぐなるように刺してやれば潮の抵抗は少ないし、ハリスに沿って曲げてやれば抵抗は受けやすい。これにとって浮力の調整ができるのである。もちろん、ボケを使ったりコウジを使ったり、餌の大きさ自体でも調整は出来るので工夫次第で楽しい釣りが出来るはずである。

今まで、仕掛けを止めて釣ることを考えてきたが、逆に最近は流して釣る方法も試し見られるようになってきた。これは、20号から25号程度のジェット天秤などの流されやすいオモリを使い、仕掛けは短めにつけてやる。投入してからは潮に流されるままにしてやるようにする。そうすると、カケアガリやシモリ、藻場などの変化のある場所に仕掛けが流れ着き、そこに仕掛けが落ち着くという釣法である。当然変化のある場所には魚がいつているので、釣果も獲易いということである。これは岡山の釣り人が境水道などでたまにやっているのを見かける。但し、変化のあるところへ流すのであるから底の状態をよく読まないと、シモリに仕掛けが巻いたりして根掛かりも多くなるし、流れされっぱなしでとまらないと言うこともある。また、周辺に他の釣り人がいると広く探るだけにオマツリの原因ともなるので、混雑している釣り場では絶対にできないと言う欠点もある。非常に効果がある釣法なので、釣り場に余裕がある場合にはぜひ試してみしてほしい。

さて、今までは急潮の場所でいかに釣るかということを考えてきたのだが、それでは潮の緩やかな場所ではどう潮を考えて釣るのだろうか。やはり、少しでも潮の変化のある場所を狙っていきたい。一見、鏡のような水面でも必ず潮は動いているはずである。水道になっている、カケアガリやシモリがある。そんなところには潮に乗って魚は必ず回ってくるはずである。じっくりと、定めたポイントを狙っていきたい。

## ④潮をよむために

ある日本海の釣り場に出かけたとき、今日は沖合いにいい潮目が出ているな。絶対に

あそこへ投げ込めば大漁だとばかりに、潮目付近に集中して投げ込む。しかし、穂先はピクリともせず何ものつかない状況だ。二枚潮た。気づいたときには時合いを逃していた。当日は沖合いを強い風が吹いていたようで、その風のため表層流ができていたようだ。その表層流が潮目を作っており、海底ではまったく潮が動いていなかったのだ。潮を気にしすぎての大失敗である。普段からよく行く釣り場なので潮の流れに注意していればもっと早くに気がつくはずであった。いつもの潮の流れる方向、そして風の向き、ごみの流れ方そして投げ込んだ仕掛けの動きそれらに注意していればわかったはずなのである。完全に見た目にだまされた結果である。

また、よく見るのだがかなりベテランの方でも沖に潮目があるのでそこを狙っているという方がおられる。確かに、その部分だけさざなみが打つように周辺とは状況が違うのである。しかし、潮もあまり流れていない状況であるし、海底の変化もなさそうだ。正体は潮目ではなく風目だ。その部分が風の通り道となり、風によって変化が生まれているのだ。それは表面的なことなので、海底にはまったく影響していないと考えられるのである。当然のことながら、魚はあまり釣れないはずである。このように見た目の潮の動きにだまされて、失敗したと言うことは多々ある。

潮を知る。それは自然すべての環境を知ることにつながるのである。キャスターとしては仕掛けを遠くに投げる、的確にポイントに投げ込めるテクニックも必要なのだが、仕掛けの動き、地形、風などの気象、そして潮時などの潮の動きすべてを考察でき、そしてポイントを定めることができるような観察力もひつようなのだ。また、科学的な情報ももちろん大切なことだ。近年はインターネットが一般的に利用され始めているので潮についての情報も豊富に得ることが出来る。次の URL は私がよく利用しているホームページである。

<http://www.mirc.jha.jp/> 海洋情報研究センター

<http://www.jhd.go.jp/> 海上保安庁水路部

皆様もぜひ参考になさっていただきたい。満潮、干潮の時間から潮位などもある。さらに潮干がる情報などと言う項目もあるので非常に便利です。また、釣宿や釣具店などの地域に密着した、潮の情報や釣況を掲載しているホームページもたくさんあるので役に立つ情報が得られるはずである。

それらすべてを身につけることが出来れば、それは必ず魚を釣ってくる“スーパーキャスター”と言えるのではないだろうか。皆様も目指してみたいはいかがでしょうか。